

令和5年度第2回京都市市民活動総合センター運営委員会 議事摘録

日時：令和5年11月29日（水）18：30～20：30

場所：京都市市民活動総合センター

出席委員：大石尚子、尾崎園子、小林明音、小林寛、杉本星子、鈴木康久、西野桂子、日下田貴政、藤本香、吉田忠彦（以上、15名中10名の出席） *敬称略 五十音順
事務局：平尾、内田、土坂、真鍋

(1) 主催挨拶

(2) 座長挨拶

(3) 議題

I. 令和4年度センター運営に関する評価報告について

事務局より資料に基づき、令和4年度のセンター運営の評価に関する報告があった。

京都市への令和4年度のセンター運営についての報告をもって、京都市設置の評価委員会が評価したものである。令和3年度までは、A～Eの5段階での評価を受けていたが、令和4年度の評価から文章のみの評価に変わっている。

全体的な評価としては、どの事業においても高い評価を受けた。ポイントを絞って報告を行ったことで評価委員会の事業内容の理解を得られ、「相談事業」において専門家相談会の分野に新たなテーマを設定することへの助言を受けることにつながったと考えている。

「交流・連携」事業の中で実施している「市縁堂」のスタイル変更については、従来の実施方法も評価されつつ、新たなチャレンジとして好意的に受け止められたようである。また、いきいき市民活動センター（以下、いきセン）との連携では、これまでの関係づくりが実を結び、多くの連携事業が生まれたことが高く評価された。

最後に、ボランティア・コーディネートにおける調査事業についても、非常に意味のある調査ができたという評価を受けた。

〈質疑応答〉

委員：ボランティア・コーディネート調査の中で、ボランティア希望者が短期・単発のボランティアを希望していることがボランティア受入側とのギャップを生んでいると書かれている。私が受入側だとしたら、短期間のボランティアでその活動のハイライトだけを享受しようとするのは甘い考えではないかと思ってしまう。

事務局：長期的な関わりを望む団体には短期のボランティア希望者を繋げられない。しかし、はじめから長期的に関わることを前提にボランティア参加をしてくれる人は少ないため、単発ボランティアとして関わってくれた人に自分たちの団体の魅力をどう伝えていくかという受入団体側へのアプローチも必要である。

委員：ただ単に色々な経験を積みたいという理由で、単発の参加を希望しているのだとすると

都合がよすぎるのではないか。

委員長：現在の大学生は、厳しく出席管理をされていて、授業を休むことのハードルがかなり高くなっている。これは大学の講義が出席重視となっていることの影響であり、ゼミの活動であっても大学の外に出ようとするると他の講義を欠席してしまうことになるため学生に嫌がられてしまう。

委員：授業の一環としてボランティア活動をすることもあるが、単位認定の形を取ってしまうため、本来の意義からずれてしまっているところがある。また、受入側も長期的なものにはインターンシップとして受け入れていることが多い。学生にとってはインターンシップとして関わった方が就職活動で話しやすかったりするのだろうか。

委員：受入側の課題としてはどういったものが考えられるか。

事務局：例えば大学生はボランティアをする際に、自己の成長や視野が広がること、経験値が上がることを求めることが多い。こうしたボランティア活動へのニーズを受入側が理解できずに団体の活動に関わってもらおうとすると、学生は何も得られず面白さを感じづらい。単純な作業をお願いするとしても、その作業が何につながっているのかを順序だてて説明し、体験をしてもらった後に振り返りを行うというプログラムにすることで活動の意味づけができていく。こうしたプログラムを用意できている団体とできていない団体でボランティア参加の広がりには違いが出ていると感じている。

委員：受け入れる側も大変だと思う。学生にはそこまでセッティングしてあげないといけないのかという感想を抱いた。

委員：評価報告の全体的な感想として、何人が利用しているかといった人数にとらわれずに、センターの機能をしっかりと果たしているかという視点に変わってきており、良いと思った。また、評価報告の中でいくつか今後の事業の提案があったが、全てを実施するかどうかは別にして、参考にしつつ次の展開を考えてほしい。

委員長：私も以前は評価委員として評価をしていたが、A～Eのいずれかの評価をしなければならないとなると、数字の実績を根拠にすることが少なからずあった。今回から文章のみの評価となったことによって、本質的な見方ができるようになったと思う。京都市に対しても指定管理者の自由な発想や新たな提案を受け入れてほしいと書かれている。しみセン開館から20年が経ち、完成度の高い運営となっているが、次は自由な発想や新たな提案を考えていかなければならない。できることに限りがあるとは思いますが、評価委員会から指摘や提案のあったものについては検討していただきたい。

II. 令和5年度上半期事業運営状況の報告について

事務局より報告があった。概要は以下の通りである。

【情報収集・提供】

- ・現在のしみセンホームページの基幹システムが今年度末で変更となるため、今年度はデータ移行やデザインを新しくする作業を進めている。
- ・ホームページのシステム変更に伴い、市民活動情報共有ポータルサイトにおいて団体が簡易に情報発信できるようにリニューアルも計画している。

- ・現ホームページには「団体マイページ」という団体の簡易ホームページを持つ機能があり、10年ほど前まではニーズが高かったが、自前でホームページを持つことが容易になったことからニーズは減っている。しみセンのホームページが唯一のウェブでの発信媒体となっている団体もわずかながら存在するため、団体独自でウェブ上での情報発信ができるようにサポートを行っている。
- ・モニター前のコーナーを団体の活動紹介や展示ができるスペースとして予約利用ができるサービスを開始した。
- ・しみセンのSNSでの発信について、LINE公式アカウントを内部で試行運用している。これまで情報が届いていなかった層への情報発信として、他のツール活用もあわせて検討している段階である。

【相談】

- ・評価委員会から提案のあった、専門家相談会の新たなテーマとして「IT環境整備」と「事業承継」を設けたが、打ち出し方に課題があり、利用実績が出ていない。
- ・「しみセンの相談機能 フル活用の手引き」という、しみセンの相談機能にフォーカスしたチラシを作成し、市内公共施設に配布した。チラシの効果を測ることはできていないが、しみセンをどう活用できるかを知ってもらうことは大事なことでと考えている。
- ・今年度は認定NPO法人化についての相談が増えている。要因の一つとして、4月に入職した職員が認定に関する実務に携わってきた経験を持っていることが挙げられる。認定NPO法人化や法人の解散の相談の特徴として、一つの団体から複数回の相談がある傾向が強く、相談があった団体数としては多くない。
- ・しみセンが相談を受けたときに、しみセンだけで全ての相談に乗ることはできないため、より専門性の高い機関につなげている。
- ・解散相談対応について、細かい実務の相談に対応するために、内部用の相談ツールを作成した。

【育成】

- ・オンデマンド講座を5タイトル提供している。オンデマンド講座受講を入口に相談につながる、あるいは相談事業の利用者に対してオンデマンド講座を案内するなど、事業の相互連携により団体の育成につなげている。
- ・オンデマンド講座の広報チラシを作成し、9月後半に市内公共施設等に配布したところ、10月の申込数は上半期の合計とほぼ同数となった。オンデマンド講座は、しみセンに来なくても情報を取得できる、動画を止めながら書類作成の確認をする、などのメリットがあるようである。
- ・分野別センターとの連携（交流・連携）を含むが、福祉ボランティアセンターとの共催にて助成金に関する講座を2回実施した。
- ・下半期には、昨年度に実施したボランティア・コーディネートに関する調査結果に基づいた講座を実施予定である。

- ・交流・連携分野で実施している市縁堂の「食べる」というテーマと連動して、10月1日に市民公開講座「シチリア島の奇跡～マフィアからエシカルへ」を開催した。2回目は「くさい？まずい？うまい！発酵食品の魅力」をテーマに12月2日に開催予定であり、現時点で102名の申込みを受けている。
- ・12月23日には、毎年恒例となっている「クリスマス・チャリティコンサート」を実施予定であり、すでに申込みが定員に達し、募集を締め切っている。
- ・スモールオフィスの運営方法の工夫として、それぞれの団体の個別具体的なアドバイスができる機会づくりを計画している。令和6年度から、しみセンのスモールオフィス入居団体を対象に、交流会とは別にスモールオフィス運営委員の協力を得て個別面談を実施予定である。
- ・相談事業や「市縁堂」事業の中で、団体と社会資源をつなぐコーディネーターやマッチングを行っている。「市縁堂」では、市内の店舗など7か所に募金箱を設置させてもらっている。団体の認知を広げるきっかけづくりと寄付の機会づくりを目的として行っている。

【交流】

- ・NPOと地域との連携を図る「しみセンつながるネット」を通じてNPOの成長と地域の課題解決につながる取組みを行っているが、実際に自治会・町内会とNPOのマッチングには至っていない。地域団体からの運営相談を受けることや、施設利用を目的に来館することが以前よりも増えたため、窓口で「しみセンつながるネット」のパンフレットを渡し、地域の状況を伺っている状況である。
- ・「市縁堂」では、今年度は伴走支援としての動きを付け加えたため、募集团体を5団体に絞った。5団体のエントリーがあったが、2団体の辞退があり、現在は3団体に絞っている。市縁堂と市民公開講座をどちらも「食べる」というテーマ設定をしたことで、団体のことを多くの方に知ってもらう機会をつくることができた。その他、団体を紹介するウェブ記事発信事業である「NPOスポットライト」やきょうとNPOセンターとして運営しているラジオ番組「FMラジオ 京都三条ラジオカフェ『Kyoto HAPPY NPO!』」に出演してもらい、そのポッドキャストのリンクを市縁堂特設サイトに掲載するなど、団体の認知度を上げるための多様なコンテンツを提供している。
- ・令和4年度から引き続き他センター連携に注力しており、下半期には分野別センターとの合同ケース検討会を実施予定である。

【施設管理】

- ・新型コロナウイルス感染症の5類感染症への位置づけ変更に伴い、感染予防対策としては、手指消毒用アルコールの設置のみを行っている。
- ・夜間の施設利用促進を目的に、ミーティングルームの予約利用のルール変更を行った。
- ・令和5年4月に公開用PCからのプリントアウト料金の改定を行った。
- ・仕入価格の高騰により、令和6年1月から販売用紙価格の改定を行う予定である。
- ・リース期間の更新に伴い、輪転機2台の入替えを行うとともに、紙折り機についても経年劣

化により機器を新調した。

【災害ボランティアセンター】

- ・平常時の取組みとして研修や訓練、連携のための関係づくりを基幹業務として運営している。
- ・令和5年台風7号による被災地支援の一環として、綾部市にボランティアバスを運行する取組みを行った。

〈質疑応答〉

委員：評価の中でも寄付の募り方への課題に触れられていたが、市民公開講座ではどのような取組みを行ったのか。

事務局：時間の都合上、市縁堂参加団体の活動紹介パネルとブースを設置し、講座終了後に参加者が団体と交流できるようにした。また、全体への案内として、市縁堂参加団体のPVを講座開催前後に上映し、団体のことを知ってもらう機会をつくった。

委員：いきセンおよび分野別センターとの連携促進では、令和4年度も高い評価を受けていたが、どのように事業計画を立てているのか。また、その中での課題はあるか。

事務局：しみセンが新規事業を立ち上げ、いきセンに入ってもらおうということはいきセンにとっては新しい負荷をかけることになるため、今のいきセンの状況の中では難しいと考えている。そのため、いきセンの各取組みを通じてしみセンに相談があったことを機に連携につながる人が多い。こうした経緯で連携事業が実施されることから、事業計画として作り込まれたものはできていない。

委員：京都市からどこかのいきセンへの支援や連携の要請などはあるのか。

事務局：しみセンの仕様書にはいきセンや分野別センターとの連携について求められているが、個別のいきセンとの連携についての要請はない。今年はしみセン・いきセンでの合同研修が計画されており、その中で京都市からの要望もあって、しみセンでの視点でお話をさせていただくことになった。

委員：いきセンが抱える課題について市としても認識しており、いきセンとしみセンが集まり、課題解決の糸口を見つけられるように合同研修会を実施する。

委員長：京都市が主催する形になるのか。

事務局：京都市が主催するのか、京都市が呼びかけて実行委員会形式にして実行委員会として呼びかけるのかはまだ決まっていない。

委員長：いきセンの立場としてしみセンや京都市に対してのリクエストや情報はありますか。

委員：しみセンがいきセン連携にどのような課題を感じているかを理解できると、いきセンとしても連携の形を探ることができるのではないかと。

事務局：例えば、情報発信サービスの共有化に課題を感じている。しみセンが出している助成金情報の共有やインフォメーションサービスの共有について、容易に連携ができると思っていたが、いきセン側の負担感の問題なのか、各いきセンとしみセンとの温度感の違いによるものか分からないが、難しいようである。

委員：町内会からの相談や連携のニーズが少ないという話があったが、町内会の現状としては、大きな困りごとというよりは日常的な些細な困りごとを抱えながら運営している。今年地域活動が再開し、私もいろいろな地域の地蔵盆をまわった。その中の一つの事例として、その町内のNPOの活動拠点を会場として提供していた。そのNPOの関係者として学生も参加しており、子どもたちが楽しめる地蔵盆が開催できた。地域がNPOと一緒にしたいことはこうした些細なことが多いように思う。NPOに対しても、地域に根付いて活動すること、地域と関わることの良い効果を伝えるというアプローチもあるかもしれない。

委員：地域の行事でこれまで使えていた場所が使えなくなって困っている町内会の話をよく聞く。NPOや企業が場所の提供という形で協力すると地域の活動がやりやすくなる町内会は多いのではないかな。

委員：場所の提供以外にも、NPOとして日々行っていることを活かして協力ができるといい。それは、回覧の案内づくりやチラシのデザインなどの、とても些細なことである。

委員：近年、京都市内の公設のセンターが地域と繋がり始めている。そうした状況の中において、センター間の連携による相乗効果が出てきているように思う。また、市縁堂と市民公開講座を「食」というテーマで統一して寄付を募っている形はとても良いと感じた。

委員：令和5年度と令和4年度の統計を比べると、しみセンの利用者数や相談件数はほぼ同数となっているが、ひと・まち交流館 京都の来館者数を見ると増えている。これは、コロナの状況に関わらず、必要としている人はしみセンを利用して利用者数は充足しているのだと捉えられる。例えば会議が対面になったことで会議室利用のために来館する人が増えた分でひと・まち交流館 京都の来館者数が増えたのだろう。一方で、SNSやオンライン会議など、インターネット上の活動が一般化してきている状況もあるため、オンデマンド講座を増やしてもよいかもしれない。他にも、LINEを用いた情報発信は効果的だと思う。

委員：オンデマンド講座は申込者のみが視聴できるようになっている。その理由は何かな。

事務局：講座参加者数のカウントが必要であり、申込者のみが視聴できるようにした。

委員長：YouTubeにしても、視聴数はカウントできるのではないかな。それとは別に、知的財産の管理や著作権の問題もあるかもしれない。検討していただきたい。

Ⅲ. 令和5年度上半期予算執行状況報告について

事務局から報告があった。

- ・下半期の事業等での執行額が増えてくるため、第2四半期までの事業費は小さくなっている。
- ・上半期の予算執行状況として赤字になっている根拠としては、4月にきょうとNPOセンターの賃金改定を行ったことが挙げられる。年間での調整が入る予定となっている。

〈質疑応答〉

委員長：修繕費とはどういった内容なのかな。

事務局：火災の時に煙を外に逃す排煙窓の1ヶ所において操作ボックスが故障していたため、修

繕を行なった。

委員：京都市が買うものとそうでないものとの線引きはどうなっているのか。

事務局：先ほどの説明の中にあつた紙折り機はリースではなく、京都市がしみセンに設置しているものであるため、京都市が買い替えを行なった。

IV. その他

(1) しみセン 20th 記念事業の実施について (2024年3月10日(日))

事務局より報告があつた。

令和5年6月にしみセン開館20周年を迎えた。指定管理切替えの時期とも重なり、6月での記念事業の実施はできなかったが、節目の年として、3月10日に実施予定である。しみセンのフロアを利用し、吉田先生からのお話と団体の交流会を企画している。ぜひ運営委員の皆さんにも出席していただきたい。

(2) ひとまち交流館 京都 20th について (2024年1月28日(日))

事務局より報告があつた。

ひと・まち交流館 京都もしみセンと同様に20周年を迎える。周年事業として、令和6年1月28日に講演会を実施予定と聞いている。

〈質疑応答〉

委員：講座アーカイブのチラシ作成の効果が高かつたとのことだが、どういったところに配布したのか。

事務局：京都市内公共施設をはじめ、京都府NPOパートナーシップセンターや京都市近隣のNPO支援センターに案内している。その他、hotpotの発送と合わせて京都市内のNPO法人、インフォメーションサービス登録団体に個別案内を送った。チラシ以外の広報としては、メールマガジンやウェブでの広報を行なった。

委員：例年7月の来館者数が多い。何か原因はあるか。

事務局：祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティア・コーディネートとして、ボランティアTシャツの配布を行なっている。普段、しみセンを知らない人の来館や、HPを閲覧することで、来館者数、ページビュー数が上がる傾向がある。Tシャツ受渡しの際に、hotpotや学生向けの広報物を一緒に渡すなど、裾野を広げる工夫も行なっている。

委員：大学に加え、中学校や高校でも探求学習が始まっており、市民活動とは何かという話は学校側が求めているのではないか。

委員：中学2年生はチャレンジ体験と呼ばれる職場体験がある。その受入れを担うことも考えて良いのではないか。受入先はしみセンでも良いと思うし、他のNPOでも良いと思う。

以上